

海外論文 & レポート

フィリピンにおける自立生活

BBMC(Bigay Buhay Multipurpose Cooperative) の経験

リチャード・アルセーニョ (BBMC 代表)

Richard D. Arceño (General Manager)

翻訳 菊地 謙

はじめに

フィリピンでは人口の10%が障害者 (Persons with Disabilities : PWDs) である。このパーセンテージは、増大しているにもか



かわらず、政府および市民にそれらの特定の問題や関心事に取り組まざるをえないよう社会推進力を結集させることはできなかった。それらの問題とは、1) 障害者にやさしい社会基盤や移動手段が不足していること、2) 障害者の持続的な雇用のための明確なプログラムがないこと、3) 障害者の健康や社会福祉の改善に応えるプログラムが不足していること、である。宗教団体や市民団体はこれらの問題に取り組む中心的なイニシアチブをとってきたが、障害者は、より依存するようになったり、さらには施しを求めて街路に戻ってしまったりして、成功しなかった。所得を生み出すプロジェクトとして裏庭産業を紹介する団体もあったが、障害者が生きていくの

に十分な収入をあげることはできなかった。しかし、得る収入が足りなくても、障害者にとって他の手段はなく、それらのプロジェクトに参加せざるを得なかった。このような悲しい境遇が、障害者に手工芸 (handicraft) だけが雇用を得る手段だという信念を強めさせた。これがいわゆる「ハンディクラフト・メンタリティー」を育てたのだ。この状況が、過度のうぬぼれや傲慢か、他人の助けやサポートがなければ生きていけないという過度の内気さや劣等感のどちらかの障害者心理を生むこととなった。

障害者組織の誕生

初期

1990年、障害を持つ学生のグループが“CODES”すなわち彼らが学ぶ場 ケソン市のトリニティ大学で彼らの夢である“ノーマルライフ”を追求する「意識ある障害をもつ学生の会」(Concerned Handicapped Students)をつくった。彼らは大学をすべての障害をもつ学生にとってより親切で利用しやすい環境に変えることを夢に描い

活を与える)多目的協同組合 = BBMC が誕生し、1991年9月10日、協同組合開発省(CDA)公式に登録され、フィリピンで最初の障害者によって運営される協同組合として正式に認証された。その成功は、9年後のある日、its revered founding figure が呼びにきた時、この先駆的なグループに賞賛と尊敬を示すことで、大学によって認められた。

小さな一歩

BBMCの事業の最初の3年間は、組合員の集中的な協同組合教育と訓練を通じた人材開発に重点を置いていた。彼らは生活のもう一つの方法(alternative way of life)として協同組合に取り組むようになった。BBMCの最初の募金活動は、キャロリング(聖歌隊)映画上映そしてコンサートだった。それらの活動による収益、とりわけキャロリングによる収益は、トライシクル(サイドカー:訳者注)を購入するために貯蓄され、そのトライシクルの収入は日常的な費用の支払いを助けた。組合員の授業料もその所得から支給された。次に彼らは、輸出用マニラ麻織物製品の下請け、ギフトゲートストアの貯金箱、下ごしらえした鶏肉の販売に乗り出し、そして電子機器修理のサービスを貧困地域にある彼らの小さな住居で立ち上げた。小さな商店も彼らの宿舎の中につくり、後にはケソン市の助役の援助により、市役所の郵便センターにつくった。これらすべての間に彼らは慎重に学



位を取得していった。

経済面だけが彼らの主要な関心ではなかった。彼らは、差別をなくし現実に普通の生活をするという彼らの夢が、コミュニティに役立つことだと理解していた。そこで、彼らはこの貧困地域の社会文化的向上に、他の能力を持った人々(other-abled individuals)が真剣な関心を示すよう、友人や支援者たちを彼らの生計プロジェクト(livelihood project)に参加させはじめた。それらのさまざまな活動には、コミュニティの夏季運動会、無料での学校の科目の補習、その貧困地域のおよそ300人の子供たちへの基礎的な識字プログラム、そして無原罪の御宿り教会(Congregation of the Immaculate Conception: CICM)の神学校の援助で設立したミニ図書館などがある。そのような活動の中で彼らは周辺の住民の尊敬と賞賛を獲得していった。このころ、ケソン市のトリニティ大学でボランティアの日本語教師として働いていた、退職した数学教師の原・アグネス・みね子さんを通じて、日本のフィランソロピー団体を知るようになった。原さんはほとんどのメンバーを語学の学生として知っており、住居兼事務所の小さな建物の家賃支払いの援助をしてくれるようになった。彼女は、日本語クラスの障害を持った学生たちがいつも欠席しているのに気づき、BBMCに関わり始めたのだった。学生の不規則な出席状況の理由を知りたくて、彼女は学生の何人かをこっそり調べ、そして突きとめたのだ。彼らは忙しく、小規模な事業の経営や、事務所の運営、そして駆け出しの協同組合のために疲れ果てていた。今日まで、彼女は誠実な支援者、親愛なる友人、そして組織のアドバイザーでありつづけている。

プロジェクトはこの種のプロジェクトとしては最初のものであり、それゆえ当市のみならず全国の歴史を画す出来事であると称え、障害者を支援する他の分野への挑戦としても役立つ、と述べた。この工場ができたことで、ゆっくりとではあったが確実に、他の障害者が表に「出てくる (come out)」ようになっていった。コミュニティはすぐにこれらの障害のある労働者たちが、コミュニティに不可欠な存在であり、積極的な一部分であること認めた。障害のない労働者たちも工場の従業員の一員となった。彼らは重い障害をもつ組合員労働者の所に雇い入れられたのである。

地方行政事務所による社会基盤の工事で、質素なコミュニティと工場の周囲に生まれだした多くのサリサリストア(雑貨屋)や小食堂が変容を示していった。現在、55人の組合員が学校用椅子プロジェクトに関わっており、11人の組合員がバッグ製造プロジェクトに携わっていて、残りは管理スタッフである。

しかし、財政はいまだ窮迫したままである。22,000脚の椅子の製造契約を首尾よく結んだとき、生産資本が不足していたため、BBMCは担保としてはその評判と信用に頼って供給者から材料を借りなければならなかった。

1996年4月、アガピト・“ブッツ”・アキノ上院議員が、BBMCにケソン市のフィリピン協同組合センターの事務所を提供した。彼は1年間家賃の肩代わりをしてくれた。彼はダマヤン・ラギ時代もBBMCを援助しており、実際、BBMCの最初のコンピューターは彼からの贈り物だった。

拡大

BBMCは、全国のさまざまな地区において障害者の協同組合連合会を結成する先頭に立った。BBMCはバギオ市のコーディネラ行政地区(CAD)のファザー・ラファエル・デスミス(FARAD)多目的協同組合、ケソン州第4地区カンデラリアのリンコッド・バナハウ多目的協同組合(LBMC)、セブ市第7地区のアトラス炭鉱コミュニティ障害者アソシエーション(AMCHA)そしてパシグ市のSIKAP多目的協同組合へ財政援助や基本的な協同組合トレーニングを行った。これら4つの協同組合は22,000脚の袖机付の椅子の製造を分担した。この最初の購入注文があったので、かれらは組合員に雇用を提供することができたのである。その所得によって彼らの貯蓄動員プログラム(Savings Mobilization Program)が進められた。彼らの所得を通じた出資への通常の拠出金は、彼らへの貸付金の原資になっている。これらの協同組合において、障害者たちは各々の工場を運営し、自立して生きることができるとを示した。彼らはその所得と貸付金を新規のベンチャービジネスやその他の必要になものに使った。BBMCは下院議院、大統領官邸(マラカニャン)そして教育文化運動省(DECS)へ、年次の学校用機の必要量の最低10%を障害者の協同組合へいつも割り当てるよう、ロビー活動をする運営チームを組織した。マグサイサイ上院議員とグロリア長官の支援で10%の割り当てが1998年の一般歳出条例の一部となり、この注文は約3,000万ペソで、500人の障害者と彼らの扶養家族に継続的な雇用を保証した。

学校用椅子プロジェクト

訪問した。国際協同組合同盟（ICA）のシンクタンク・コンソーシアムは1999年2月にBBMCの視察を行っている。地域の場面では、レイテのタクロバンにあるパーペチュアル・ヘルプ信用組合とブラカンのマロロスにあるサント・ロザリオ信用組合は、BBMCへの賞賛を表明している。BBMCは、日本のアガベ交換研修プログラムにフィリピンの障害者の代表として選ばれた。アメリカのニュージャーシー・ファミリーライフ・アポストリートからは毎年12月に定例訪問がある。この両国からの個人ボランティアたちが継続的にBBMCを訪れサービスを提供し、組合員たちと親交を続けている。より近い地元では、アテネオ・デ・マニラ大学やデ・ラ・サリエ大学そしてフィリピン大学の学生も、BBMCがなぜ自助グループとして成功したかを、徹底的に分析し、批判検討した。フィリピン工科大学の協同組合研究所（ICA）はBBMCを深く研究した最初の専門的研究機関であり、1992年のずっと以前からBBMCのコンピューターセンターの実行可能性について研究していた。そしてそれは1998年にBBMCとのタイアップで協同組合研究所の学生の実地訓練（OJT）のために設立されることとなった。また、BBMCは国際ロータリークラブの地区総会（DISCON）の中で、各地区やクラブのレベルでの障害者のための常設委員会を創設し制度化する決議を結局可決した、3780地区国際ロータリーと関係を築くことができた。

BBMC 自立生活センター

2000年、ケソン市ノバルチェスのノース・オリンパス地区で自立生活センター（ILC）の落成式が行われた。自立生活センターは、BBMCの貯蓄と日本の虹のグループそして

日本のソニーが共同で購入した238㎡の区画に建てられた。自立生活センターの建物は、日本政府、日本財団、そしてその他の日本の友人たちの支援を通じて実現した。センターにはコンピューターセンター、人材開発とりハビリテーションセンター、若い障害者のための特別教育施設、そして職業訓練センター



が置かれた。このセンターの最重点プログラムは、病気の一層の進行を阻止するため、最も早い段階で障害に取り組む「障害をもつ子供と青年プログラム（CWDP）」である。最も恩恵をこうむるのは、最貧の家族たちである。このプロジェクトは、障害をもつ子供たちを施設に入れるしか選択肢がなかった親たちと、協力し合って進める。このプログラムは、子供たちの社会参加を進める一つの指標として示されるであろう。「実務能力プログラム」ではBBMCの年長の組合員の管理者養成を増やしていく予定である。このプログラムを希望する人たちのため、ボランティアや教師、インストラクターたちが、夜間学校を開くであろう。